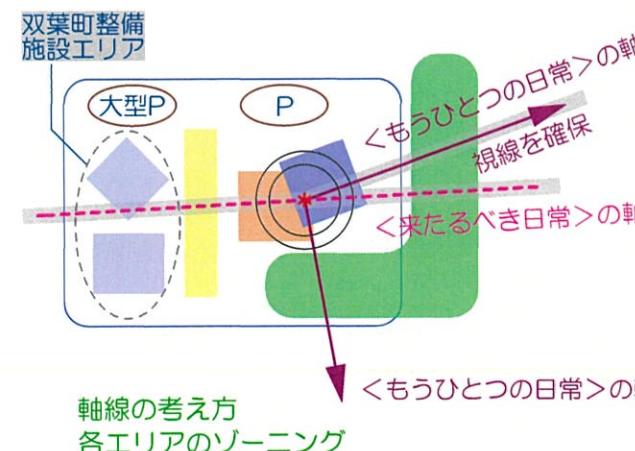
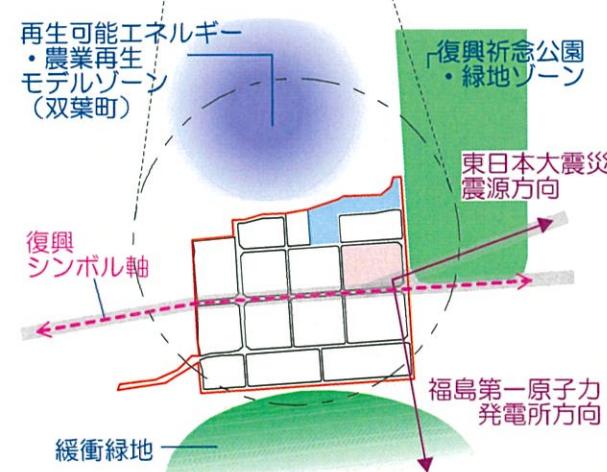
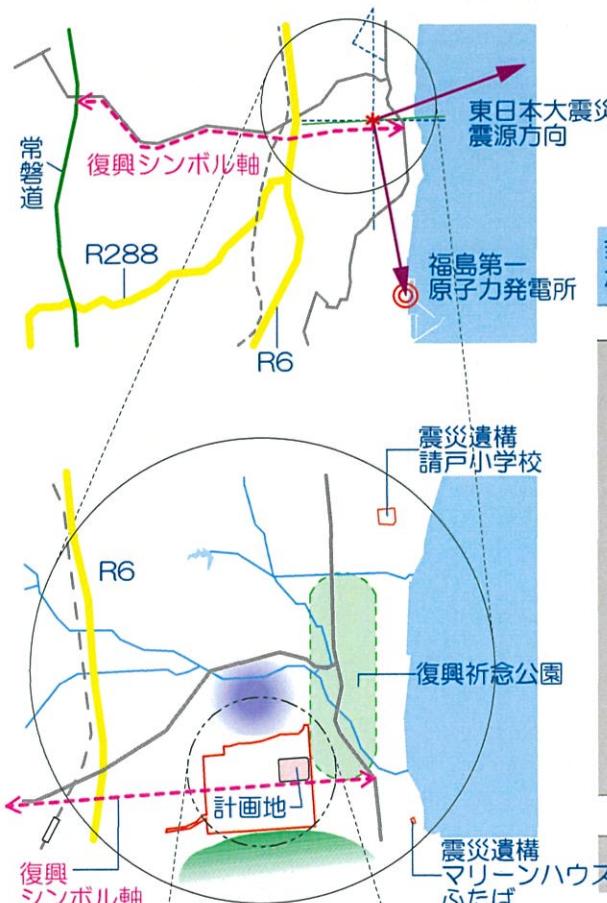
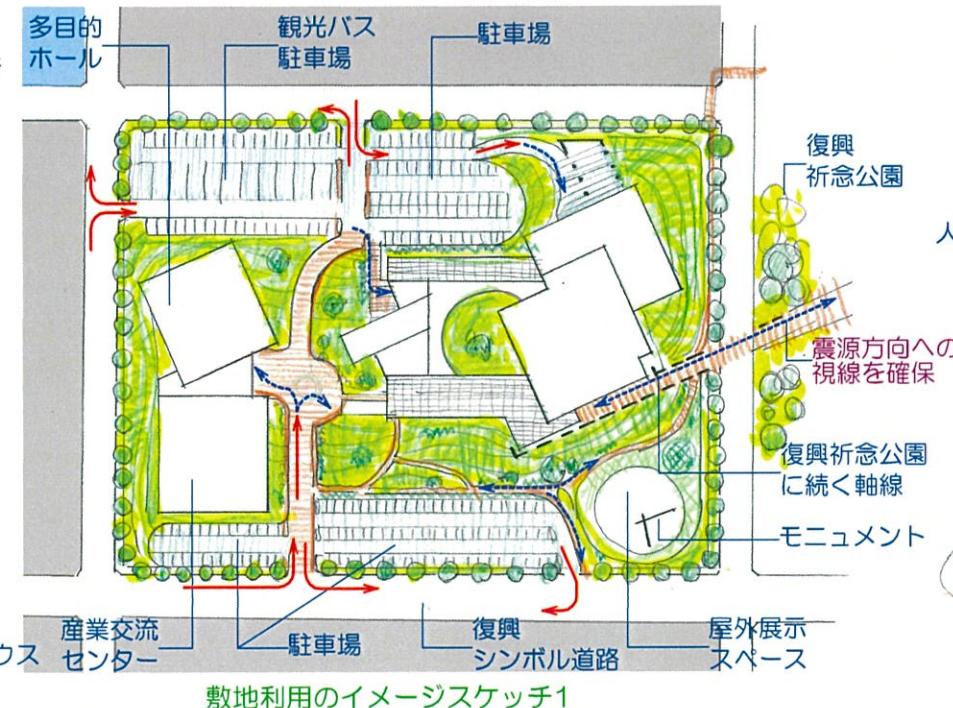


~~~<もう一つの日常>を見据えながら<来たるべき日常>を掴んでゆく~~

◆復興の拠点としてのアーカイブ拠点施設等の配置のあり方について



▷計画地を基準とした場合、震災・津波被害の起点となつた震源地の方向と、放射線災害の起点となつた福島第一原子力発電所の方向は、ほぼ直交している。これを<もう一つの日常>の軸と捉え、一方計画地南面の復興シンボル道路を<来たるべき日常>の軸と捉え、施設計画の手がかりとして対比的に設定する。

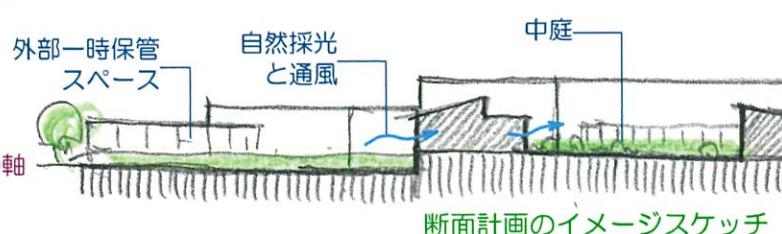


▷閉じたエリア（展示・プレゼンテーション、資料保存）を海側の<もう一つの日常>の軸上に、その他のヒューマンスケールの諸室を、中庭を介して陸側の<来たるべき日常>の軸に配置し、「双葉町産業交流センター」、「多目的ホール」と向かい合わせる。

▷震源地の方向を見通せる復興祈念公園の計画。
▷駐車場は、南側基幹道路に面して来館者用100台、建物背後の北側に職員・大型バス他最大対応用150台と分散させスケール感を保つ。前面の駐車場は緑化型床仕上げ。

▷大型バス等は正面エントランスに着けて団体来館者を乗降させ、北側駐車場で待機。

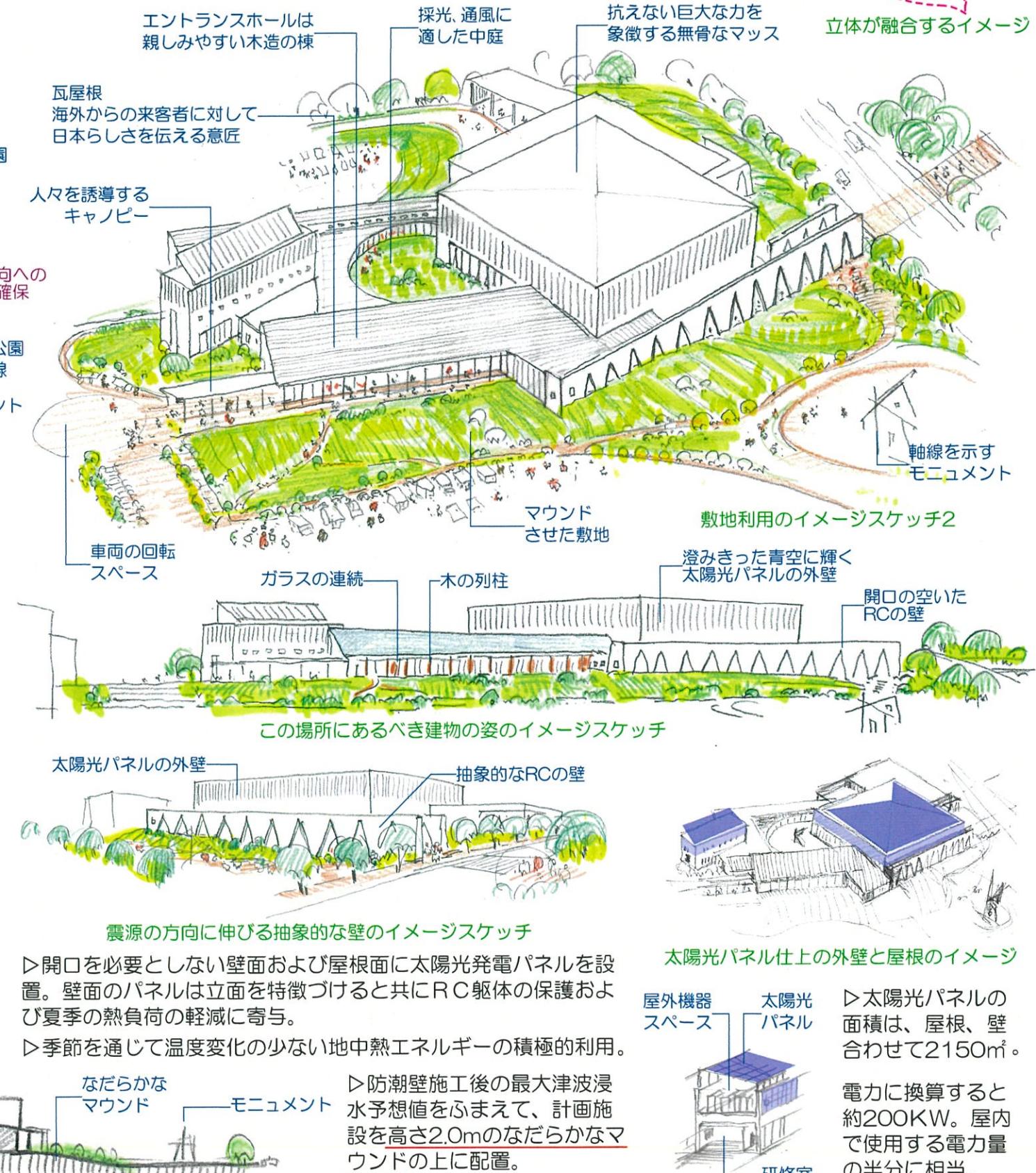
▷本施設に設ける太陽光発電設備（後述）の他、隣接周辺地に構想されている産業・研究・業務施設にも同様の設備の設置を促し、さらには双葉町によって構想されている「再生可能エネルギー・農業再生モデルゾーン」と一体となって「再生可能エネルギー・プラント」を構成。



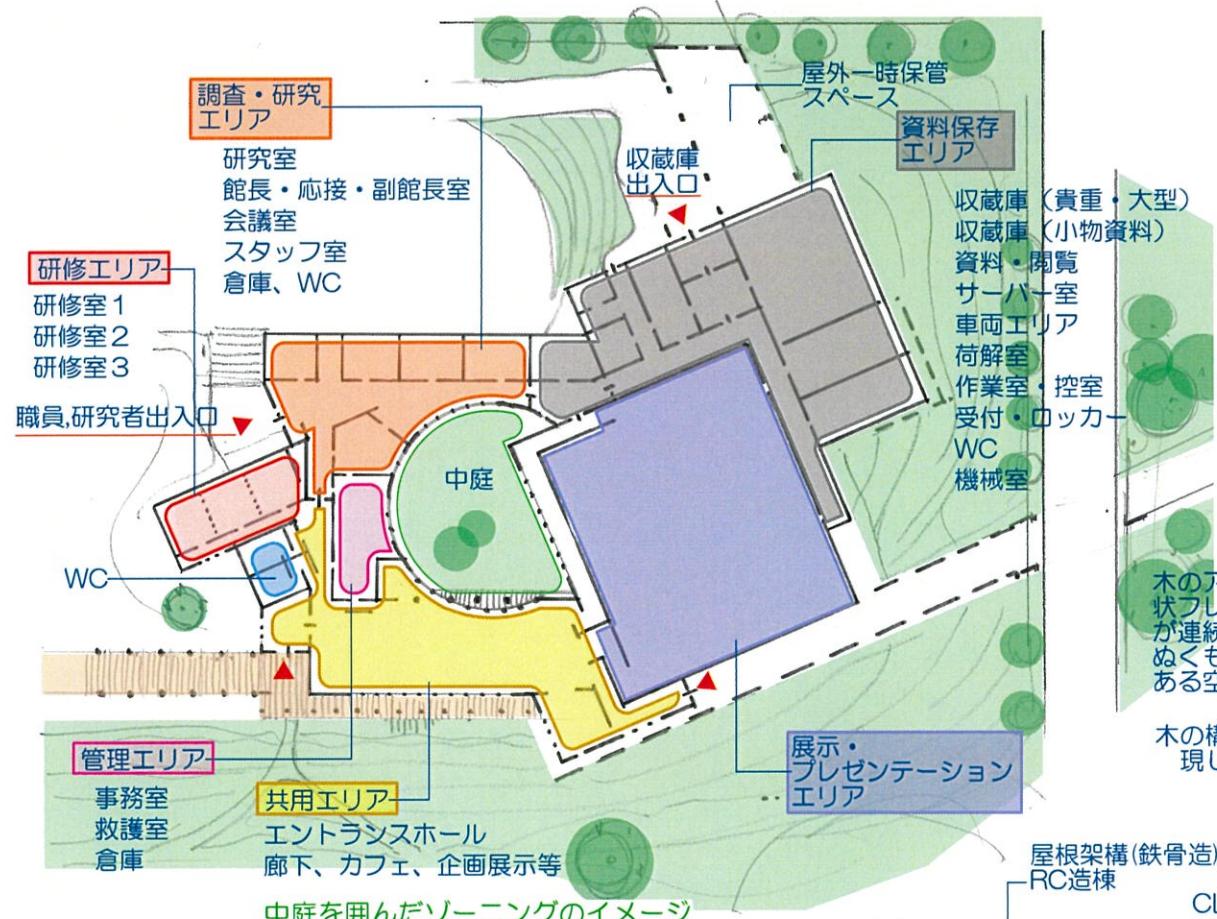
◆複合災害の記憶を未来へ継承するための建築物としてのるべき姿について

▷抗えない巨大な力を象徴して<もう一つの日常>の軸に乗る展示室の無骨なマッスと、明るく確かな将来を象徴して<来たるべき日常>の軸に乗るエントランスホールの来館者の活動を表するガラスの箱の対比。

▷復興祈念公園から続く大きな開口の空いた抽象的な壁は、震源地を指示し、特徴的な開口部は放射線災害の現場に視線を促す。



◆施設利用形態の変化に対応した施設整備と各エリアの連携及びセキュリティを考慮した利用動線のあり方について



▷中央の円形中庭はくもう一つの日常とく来たるべき日常を摺り合わせる象徴。来館者は中庭を見やり展示内容を思い返しながらエントラシスホールに戻る。研究者や職員の日常活動に寄り添うやすらぎの場。

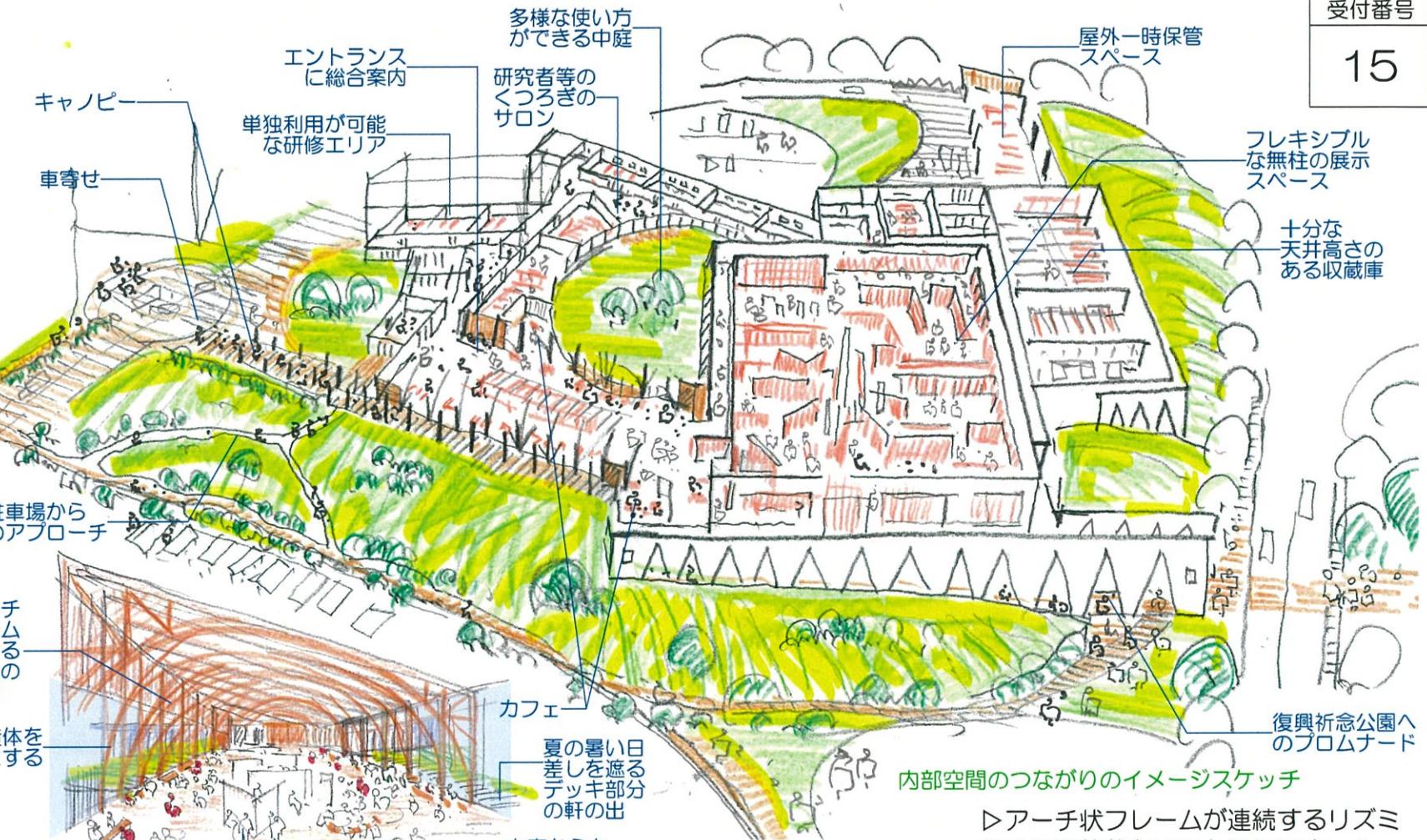
▷エントラシスホールの構造はアーチと立体トラスの木造、その他の部分はRC造。

▷展示物の倒壊を防止し、貴重な収集・保存資料を保護するために、展示・プレゼンテーションエリアと資料保存エリアに限定してフロア免震を採用し、イニシャルおよびランニングコスト低減を図る。



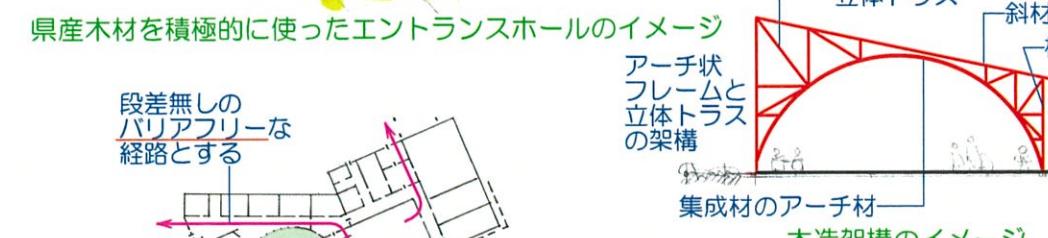
▷両者の動線を明快に分離し、わかりやすい動線計画。

セキュリティに配慮したゾーニング
▷開放ゾーンと非開放ゾーンの接点にセキュリティ設備を設置。



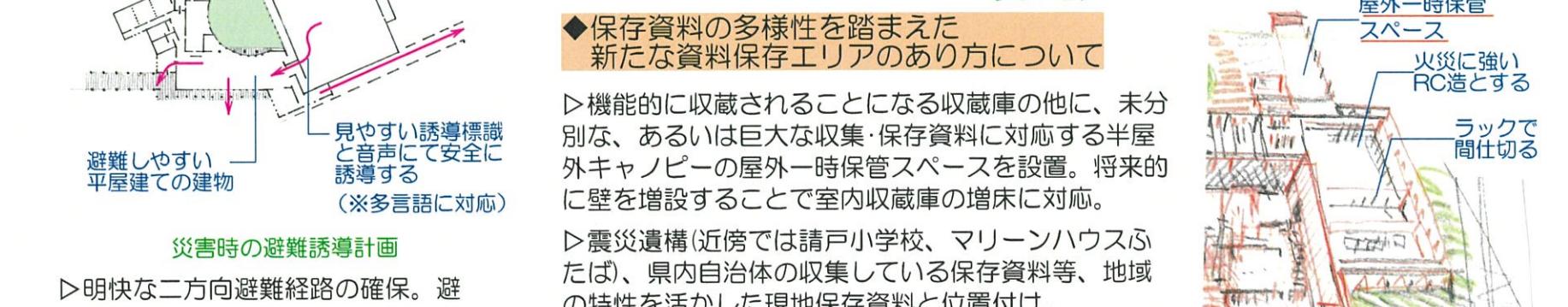
▷アーチ状フレームが連続するリズミカルで開放的なエントラシスホール。企画展示やカフェテリア等の賑わいが表出。

▷林業の活力を維持する県産木材の積極的な利活用。水環境の保全、CO₂の固定、生態系や生物多様性の維持、等に寄与。



災害時の避難誘導計画

▷明快な二方向避難経路の確保。避難先は高さ2.0mのマウンド上。



◆保存資料の多様性を踏まえた新たな資料保存エリアのあり方について

▷機能的に収蔵されることになる収蔵庫の他に、未分類、あるいは巨大な収集・保存資料に対応する半屋外キャノピーの屋外一時保管スペースを設置。将来的に壁を増設することで室内収蔵庫の増床に対応。

▷震災遺構(近傍では請戸小学校、マリーンハウスなど)、県内自治体の収集している保存資料等、地域の特性を活かした現地保存資料と位置付け。